2019年12月14日　　生・労働・運動ネット富山

「生の拡充／生のサンジカ」プロジェクト・2019

第９回　2019年・初冬　〈68=69〉年から50年後に
「遠くまで行くんだ」と歩いた日々

埴野 謙二　「生・労働・運動ネット富山」

タイムスケジュール

13：30　開始

はじめに

2019年・初冬　〈68=69〉年から50年後に

「遠くまで行くんだ」と歩いた日々

埴野 謙二　「生・労働・運動ネット富山」

〈10分休憩は随時〉

16：20　延長？　次回案内

16：30　終了

2019年・初冬
〈68＝69〉年から50年後に

はじめに

—歌　（註①）

Ⅰ部〈68＝69〉年から 50年

「〈風〉の年代記」　（註②）

Ⅱ部「遠くまで行くんだ」　（註③　＋資料A）

Ⅲ部　1.　「遠くまで行くんだ」と歩いた日々　（註④資料B）

2.-1　「もっとも遠くまで」行こうとした者・たち

（註⑤資料C-1、D-1）＋　＃＃付記参照(P.3)

2.-2　笹岡紘子の軌跡　（註⑤資料C-2、D-2）

2.-3　坂本守信さんの軌跡　（註⑤資料C-3、D-3）

おわりに・・・・？

—歌（註⑦）

・・・・横合いから—〈6 8=69〉年から 50 年の暮れかたに

—歌（註⑧）

おわりようもなく・・・・

—歌（註⑨）

—歌（註⑩）

〈註〉

①加藤登紀子「 そこには風が吹いていた」Cover 版 4：52

②「〈68 = 69〉年から 50 年」〈風〉の年代記　スクリプト　資料

③中島みゆき『世情』ピアノ弾き語り Cover 版　歌声の前まで

資料Ａ

—1、2、3「遠くまで行くんだ」

吉本隆明 「涙が涸れる」(1954)資料

福田善之「遠くまで行くんだ」(1961 青芸)

白土三平「伊賀の影丸」(大島渚によって 1967 年静止画により映画化)

雑誌「遠くまで行くんだ」(小野田襄二編集 1968 ~74)

④資料Ｂ

Ｂ―１　蓮見圭一『別れの時まで』(2011 刊 2013 小学館文庫化」)

Ｂ―２　篠田節子『冬の光』 (2015 文春 2019 文庫化)

Ｂ―３　坂手洋二『最後の一人までが全体である』

⑤資料 Ｃ

Ｃ―１　電気紙芝居『東アジア反日武装戦線』スプリクト

Ｃ―２　笹岡紘子の軌跡（『冬の光』から作成）

into the past

Ｃ―３　坂本守信さんの軌跡

Piano Einheitsfrontlied (United Front)

⑥資料Ｄ

Ｄ―１　桐山襲「虹の力にみちびかれながら」(インパクション 85 ／ 3)

Ｄ―２　松井久子・ドキュメンタリー「何を怖れる」

Ｄ―３　坂本守信さんのたたかい

⑦ボブ・デイラン「風に吹かれて」字幕付き

⑧都はるみ『ムカシ』

⑨レナード・コーエン「The Partisan**」**

⑩ S.E.N.S**「レクイエム」＋「八十のテロリストということやある**

ひとつの憤怒やりすごしつつ」(坪野哲久)

＃＃付記

「ぼく・らは、バリケードを築いているなかでも、それをめぐる攻防の中でも、『遠くまで行くんだ」と合い言葉のように語り合っていた。

やがて 69 年の暗い冬がすぎ、多くの者がきらびやかになる都市（まち）に散っていったが、「遠くまで行くんだ」という言葉を手放せず、バリケードによって封鎖されていたことなどなかったかのように調えられた秩序に帰順しなかった者も、またいたのだ。

その帰順しない在り方も、非帰順もあれば、反帰順も抗帰順もありというように多様だった。

そのなかで注目すべきなのは、医学部とその周辺の人々であり、その人々の流れは、今日でも継承され、民衆と医療とを繋ぐ担い手として闘いは続いている。」－〈68 ＝ 69〉年から 50 年を過ぎることになるが、その広義の『地域医療」をになって、「遠くまで」歩いた人々については、いずれ触れたいと思う。

資料　註②　Ⅰ部　〈68＝69〉年から50年 －「〈風〉の年代記」

タイトル・朗読など	音
〈0〉	『ペゴロスの母へのワルツ』豊田裕子 Youtube 1：00
〈Ⅰ〉Ⅰ部　〈68 ＝ 69〉年から 50 年 ―〈風〉の年代記	1.風 0:20
	2.音楽アルフィー『Rockdom 風に吹かれて』末尾の聴衆の声 7：31 ～ 8：04　註⑪
	3.フリー効果音 Otologic　風　合成環境 02 0：20
	4.音楽『風に吹かれて』0：44 ～ 6：22
朗読　桐山襲『戯曲・風のクロニクル』P4 8	
	1.音楽『風に吹かれて』末尾
	2.風の音（効果音）～ 3 とおなじ
朗読『風が過ぎ去った全ての年代を甦らせる』	
〈Ⅱ〉	1.風の音～ 11 ー 3 とおなじ 0:32
	2. 映画「怒りをうたえ」② １９６９・１・１５１６　音声だけ 18:52
	3.（おすすめ効果音環境系風 0：20
〈Ⅲ〉	
朗読『風のクロニクル』 P 94	はためく赤い旗 0:20
〈Ⅳ〉	1. 都会の道路 0:30
朗読『風のクロニクル』P14 、16	
	2.〈Ⅳ〉とおなじ 0：30
朗読「風のクロニクル』P18	
〈Ⅴ〉	1. 暗闇の中で遠くに輝く旗 0：20
	2. アルフィー『幻野祭』伴奏なし　註⑫
	3. 風にはためく旗 World flags Utuni Bolivia 0:23
朗読『風のクロニクル』P112	
画像「遠くに輝く旗」のアップ	5.画像にだぶらせて 音楽 A Las Barricadas
朗読『風のクロニクル』 P48	
朗読『叛乱ーそれは、かってあり、いまもあり、これからもあるだろう一風の中のいくつもの都市で』	5 の音楽　大きくなって
〈Ⅵ〉	〈0〉と同じ　『ペコロスの母へのワルツ』／ 豊田裕子 2:21

註⑪　アルフィー　「Rockdom　風に吹かれて」歌詞

覚えているかあの夜　20 歳の誕生日
お前と聞いた“サマー・タイム・ブルース”

若さの他には何もない　俺達の愛は転がる石のようだった

そこにお前がいるそれだけで　倖せと感じてたあの頃
安いバーボンで酔うほどに　未来は俺達のためにあると信じてた

When I was young 1969　風に吹かれていただけさ

ロック・アウトされたキャンパス
やりきれないほどに灰色の毎日だった
あいつが死んだ夜も　何も知らすに俺達は　抱き合ってた

時の流れに追われる俺に　ふと懐かしくよみがえる
愛と呼ぶには幼なすぎた　お前との暮らしとその微笑みすべてを
When I was young 1969　風に吹かれていただけさ

Oh Yeah

陽炎のように光の中で　揺れてる想い出たち
懐かしき恋人　仲間たちの笑顔　まぶしく輝くその時

涙の雫があふれだして
よみがえる二人の“アズ・ティアーズ・ゴー・バイ”別れの朝背中にもたれ
サヨナラも言えずに壁を見つめていた

そこにお前がいるそれだけで
倖せと感じてたあの頃
安いバーボンで酔うほどに
未来は俺達のためにあると信じてた

When I was young 1969　風に吹かれていただけさ

俺達の時代を忘れないで　風に吹かれていたあの頃を× 3
俺達の時代を忘れないで　俺達の時代を忘れないで…
俺達の時代を忘れないで　俺達の時代を忘れないで…

註⑫　アルフィー『幻野祭』　歌詞

記憶の彼方に時代は彷徨い　あの日の叫び声がこだまする
立ち昇る炎と赤いバリケード　僕等は何のため闘ったのだろう
ただ遠くへとひたすら祈った　解放と変革の 1969
Camival! Carnival! 幻の夜を越え　あの日の傷みを忘れはしない

路上で砕け散ったイデオロギー　まるで僕だちとの愛のように
鳴り止まぬシュプレヒコールバリケードの中　僕たちは最後のくちづけをした
始めるために終わらせたかった　解体と崩壊の 1969

Camival! Carnival! 挫折の時代を越え
戦士の鎮魂歌（レクイエム）奏でるアジティション
理想を求めて誰もが傷ついた　燃え上がれ!　燃え上がれ!　夜空を焼き尽くせ
祭りの終わりの刹那の中で

対立　協調　自立の世代に
弾圧　抵抗　夢見た幻想
友情　愛情　裏切る現実
軋轢　沈黙　見えない真実
ああ　もう一度語り合いたい

サヨナラを永遠に僕は言わない These Day
s
闘うことでしか守れなかった　時には愛さえも　優しささえも
幾つもの罪を僕たちは抱えて
何処に向かって走り出したのだろう　信じるために　信じあうために
自分さえ疑ったあの遠い日々

Camival! Carnival! 幻の夜を越え　あの日の傷みを忘れはしない

断絶　断罪　憂鬱な世代よ
権力　闘争　失くした情熱
反動　造反　捏造　糾弾
絶望　全ては　未来の喪失
ああ　もう一度走り出したい

Camival! Carnival!　幻想 Rovolution　あの日のときめき忘れはしない

Camival! Carnival!　挫折の時代を越え
戦士の鎮魂歌(レクイエム)　聞こえるアジティション
幻想(まぼろし)を誰もが追いかけていたのさ
燃え上がれ!　燃え上がれ!　夜空を焼き尽くせ　祭りの終わりの刹那の中で
サヨナラを永遠に僕は言えない　These Days

註③　資料Ａ―１、２、３「遠くまで行くんだ」

涙が涸れる

けふから　ぼくらは泣かない
きのふまでのように　もう世界は
うつくしくもなくなつたから　そうして
針のやうなことばをあつめて　悲惨な
出来ごとを生活のなかからみつけ
つき刺す
ぼくらの生活があるかぎり　一本の針を
引出しからつかみだすように　心の傷から
ひとつの倫理を　つまり
役立ちうる武器をつかみだす
しめつぽい貧民街の朽ちかかつた軒端を
ひとりであるいは少女と
とほり過ぎるとき　ぼくらは
残酷に　ぼくらの武器を
かくしてゐる
胸のあひだからは　涙のかはりに
バラ色の私鉄の切符が
くちやくちやになつてあらはれ
ぼくらはぼくらに　または少女に
それを視せて　とほくまで
ゆくんだと告げるのである

とほくまでゆくんだ　ぼくらの好きな人々よ
嫉みと嫉みとをからみ合はせても
窮迫したぼくらの生活からは　名高い
恋の物語はうまれない
ぼくらはきみによつて
きみはぼくらによつて　ただ
屈辱を組織できるだけだ
それをしなければならぬ

吉本隆明　「涙が涸れる」(1954)資料

を捕食するが、日中は中層に群れる。大型魚は食中毒を起こすシガテラ毒を持つことがある。フエフキダイ科。全長60㎝。

撮影地・モルディブ
文・写真　田口　哲
（水中記録家）

【おじさん図鑑】

▷965

遠くまで

おじさんの若き日、脳裏にいつも鳴り響いていた言葉は、吉本隆明の詩「涙が溜れる」の中の一節「とほく（遠く）までゆくんだ」だった。「けふからほくらは泣かない」で始まるこの詩は、「とほくまでゆくんだ」と青春のロマンチシズムと覚醒への決意とを高らかに歌い上げた。

おじさんのみならず、同世代の若者のほとんどが「とほくまでゆくんだ」のフレーズを愛し、ほとんど時代の合言葉とさえいえるものとなった。

その後、「遠くへ行きたい」という永六輔作詞の歌が流行したが、「遠くへ行きたい」は感傷的な願望にすぎない。「とほくまでゆくんだ」の鮮烈な意思表明には遠く及ばなかった。

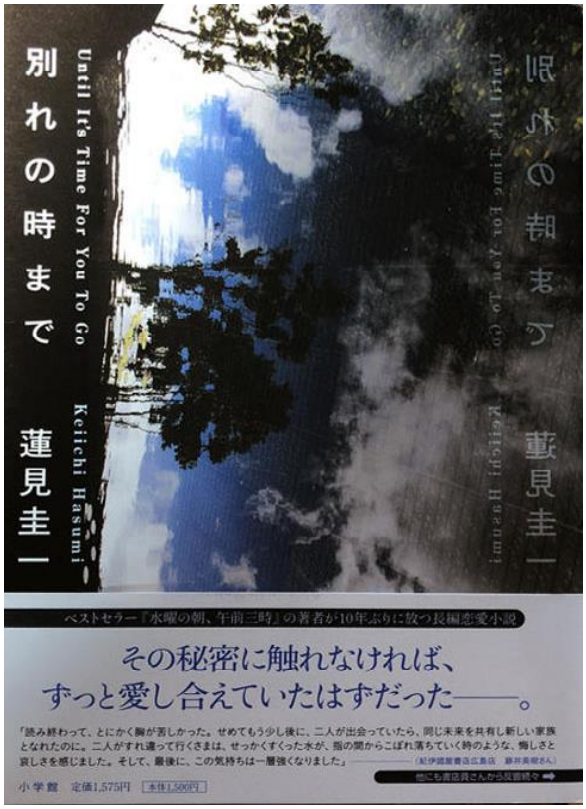
吉本隆明「涙が溜れる」は1954年の詩だから、終戦から間もない時期のものだ。戦後の復興期からいよいよ本格的に新生日本を軌道に乗せる時代であった。

戦後66年を経過し、今年また日本に大厄災が降りかかった。誰彼が悪い、と責め立てても無意味だ。わしら一人一人が、今ある自分の位置から旅立たねばならない。「とほくまでゆくんだ」と胸を張って、大胆に歩を進めねばならない、とおじさんは思うのだ。

（飛鳥圭介、エッセイスト）

註④　資料Ｂ―１　『別れの時まで』（小学館）　著者：蓮見 圭一

中年男女の恋愛ものが急展開



編集者の松永は、〈家族〉をテーマにした手記の入選者の一人、毛利伊都子と会って心を引かれる。

伊都子は、松永より四つ年下の 35 歳で、劇団の女優だ。伊都子には 9 歳の息子がいるが、夫については手記にただ「息子は父親を早くになくし」と書かれているだけで、素性が分からない。松永自身も妻を早く亡くし、中学 1 年の娘早紀と 2 人で、暮らしている。家が近いことから、松永と伊都子は子供ぐるみで、付き合いを始める。当初は、手記に夫のことを書き足すよう頼むのが目的だったが、それなら入選を辞退すると伊都子に言われ、松永は当惑する。中ぶらりんのまま、2 人の交際は続く。

やがて、公安の刑事が松永に接触を求め、物語はがぜん緊張感を帯びてくる。刑事たちは、伊都子のことを根掘り葉掘り聞き出そうとする。あいまいにされていた伊都子の過去

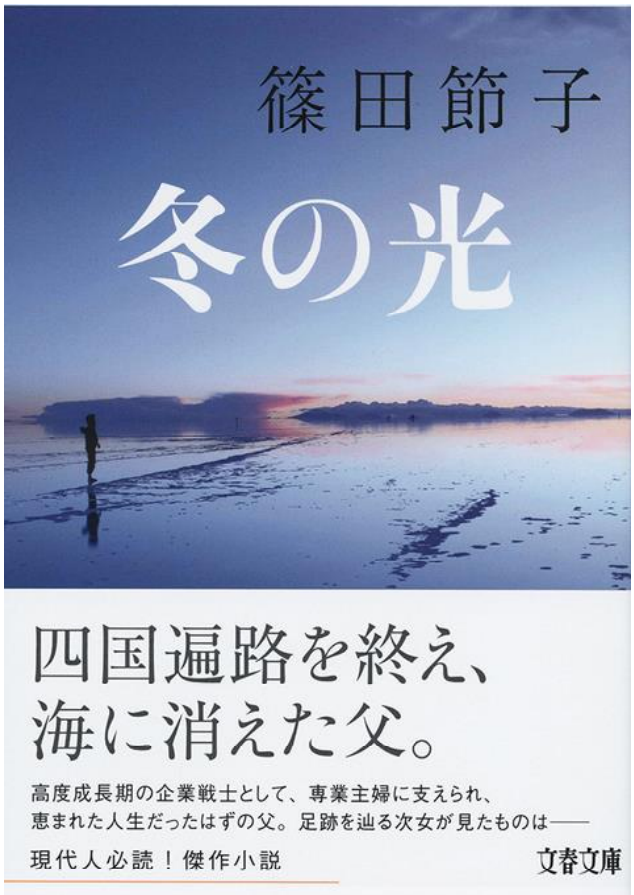
や息子の父親の消息が、少しずつ明らかにされる。さらに、30 年以上前の過激派による企業爆破事件の謎が浮かび上がってくる。息子の父親は生きており、過激派の一味として追われているらしい。

こうして、子持ちの中年男女の恋愛もの、と思われた小説が急展開して、サスペンス小説の様相を呈し始める。刑事から、伊都子の動静を探るように頼まれると、松永は真実を知りたさのあまり、断りきれない。その点松永は、いわゆる〈男の生きざま〉小説の主人公とは一味違う、人間的弱さを持つ。結局、そうした松永の優柔不断さが、この小説を安易なハッピーエンドに終わらせない予兆的な伏線になっている。

文章は読みやすく、しみじみとした味わいを持つ。独特の情感は、先年物故した藤原伊織の世界を彷彿（ほうふつ）とさせるものがある。好感の持てる小説だが、タイトルと帯の惹句（じゃっく）のせいで、結末がストレートに予想されてしまうのは、いささか惜しい気がする。

註④　資料Ｂ―２　ある男の人生が見せる社会の深遠

『冬の光』　（篠田節子 著）



四国遍路の帰路、徳島発のフェリーから冬の海に消え、水死体となった父。その父は 20 年以上も家族を裏切り続けていた。家庭にも恵まれ企業人としても一定の地位を得た父は、なぜ外に愛人を持ったのか。そしてなぜ船から身を投げたのか。次女の碧（みどり）は父の遍路を辿ることを決意した――。

充実した創作活動を続けてきたベテラン作家・篠田節子さんの最新刊は、1 人の男性の一生を通して人生の混沌や社会の悲劇をあぶりだす長編小説だ。

「老境を目の前にして、自分が歩んできた小市民的な人生に意味を見出せなくなる、実存的な不安のようなものを描きたいと思いました。男性だけでなく私自身も、しばしば立ちすくむことがありまして。『ホーラ』の取材で地中海の島の正教会を回って巡礼の姿を目にしたときざわざわとした違和感と畏敬の念が残りました。今回、失われた自分の根っこを探す場所はどこだろうと考えたときに、やはり宗教に近づき、しかし宗教にはじき出さ

れる現代日本人の精神構造に行き着くかと」

そして、もう一つの社会的なモチーフとして、戦後の階層社会がもたらした男女関係のひずみがあるという。

篠田節子（しのだせつこ）／ 1955 年東京都生まれ。97 年『女たちのジハード』で直木賞、本年『インドクリスタル』で中央公論文芸賞受賞。近著に『ミストレス』『長女たち』など。

作中、父・康宏は様々な女性と交わる。例えば、25 年間愛人として関係を持つ笹岡紘子（ひろこ）だ。康宏と紘子は学生運動の暴動をきっかけに肉体関係を持つ。しかし、その後 2 人は別れ、康宏は出世競争に熱中し、“紘子のように対等に話はできないが、女性として尊敬できる”短大卒の女性と結婚する。一方、紘子はそのまま学業の道に進み、周りの理解を得られない環境にあっても社会的な矛盾と戦う。その 2 人の運命は切れることなく交わり続ける。

「男女関係なのか、親友なのか、ソウルメイトなのか、人と人の関係なんて、カテゴライズできないし宣言して始まったり、『絶交よ』と言って切れるものではない。でもこの夫婦は、紘子さんは関係なしに、初めからボタンを掛け違えている。例えば康宏は『料理を作ってくれて、お金の管理をしてくれてありがとう』と感謝しますが、性別役割分業制が、たまたま破綻なく機能しただけ。そこに家族の情が加わったにせよその先の虚無が覆い隠されるわけじゃない」

碧は、ある人との電話がきっかけで改めて父の自殺に疑問を持つ。そして命日に徳島からのフェリーに乗り、父が最後にカメラに収めようとしていた景色の意味を理解する。

「若い碧はその景色を見て涙をこぼしたりするけれど、父の抱えたものはわからない。それでいいし、それが親子だと思います」

註④　資料Ｂ―３　坂手洋二　『最期の一人でま全体である』

縦書きのため　最終ページから

註⑤資料Ｃ― １　「虹」の年代記―もっとも遠くへ行こうとした者・たち

タイトルなど	音
＃ 00 縦書き「君が代を　囓り尽くせよ　夜盗虫」（＊0） （三行に分けて順に）　白地に黒文字	林光「君が代」0:21~0:32
＃⓪　　白地 （＊1）ナレーション	Giovanni Marradi's Greatest Hits 4:34~8:46
「虹」の年代記―もっとも遠くへ行こうとした者・たち 黒地に白文字 いのちをかけた言葉が　吐きたい　白地に黒文字 いのちをかけたおこないを　したい　（註ｉ）	
＃①『虹作戦』（註ii）　白地に黒文字 『陳述』　（＊２）　ナレーション ねらい（註iii） ―計画―作業―挫折―転換　著述に応じて	
＃② ―警告 （＊２）ナレーション 『三菱爆破』　動画（＊３） 『声明』　白地に黒文字 （＊４）ナレーション	
＃③　『三菱爆破』以後 事件の表　（＊５） メンバーその後　字幕（＊５）	無音
＃④　大道寺将司死去　動画（＊６）	音あり
＃⑤　大道寺将司の俳句　（＊７）	Into the past を繰り返す
＃⑥　「私の屍体（したい）を地に寝かすなお前たちの死は地に休むことができない私の屍体は立棺の中におさめて直立させよ」（註ｖ）　黒地白文字　縦書き	
＃⑦　最も遠くへ行こうとした人々 ナレーション（註vi）	
＃⑧「さようなら大―道―寺―将―司さん」　黒地に白文字	勇気一つを友にして
大道寺将司の「死刑確定」（1987 年）の２年後 大道寺将司の「獄病死」（2017 年）の２年後	

注＊

＃ 00 ―（＊ 0）　大道寺将司『棺一基』

＃０―（＊１）

「華僑青年闘争委員会は、一九七〇年「七・七　盧溝橋 33 周年」日帝のアジア再侵略阻止人民大集会」において、「日本階級闘争の中に、ついに被抑圧民族の問題は定着しなかったのだ」「抑圧民族としての立場を徹底的に検討して欲しい。われわれは、さらに自らの立場で闘いぬくだろう。このことを宣言して、あるいは訣別宣言としたい」という声明を発して新左翼への不信を突きつけた。在日朝鮮人・中国人にとって生死を賭けた入管法案反対運動を、日本の左翼運動はどこまで本気で闘っているのかという糾弾であった」「被抑圧民族の側からこの日本を見直すということ・・・・」が、それ以後、私達の研究会の緊急なテーマとなっていった。」

「機動隊の圧倒的な力に抑え込まれていった全共闘運動、七〇年安保闘争をふりかえるとき、「やるだけはやったのだ」というアリバイ的総括には何の意味もないのだった。安全な日本にいて、いくら「アメリカはベトナムから出て行け！」と叫んでみても、現実にそれを許している以上は百万遍の叫びも意味のないことではないのか。エルネスト・チェ・ゲバラの「第二、第三のベトナムを！」という呼びかけに応えるには、この日本で武器をもって機動隊政治を破り、ベトナム侵略加担を実際にやめさせる以外にないはずだ・・・・」　　松下竜一『狼煙を見よ』（『文芸』25 巻 4 号 84 年 1 月）から

＃１―（＊２）

虹作戦＝１９７４年八月一四日

ねらい

私たちは、幾千万のアジア人民を殺害した旧日本帝国主義者の子孫であり、敗戦后日帝の新植民地主義侵略・支配を許容・黙認し、旧日帝の政治家・官僚・資本家の群を再生させた日帝本国人です。従って、私たちは現在、新植民地主義侵略・支配の上に、すなわち、特に東アジアを中心とする人民に対する収奪・搾取・抑圧の上に「平和で豊かでなまぬるい」小市民生活を保障されているのです。

朝鮮戦争特需やベトナム特需で肥え太り、さらにいぎたなく食欲に、侵略・収奪・搾取を継続あるいは開始した日帝の侵略企業に対して、韓国で、タイで、マラヤで、インドネシアで、反日帝の闘いが血みどろに展開されています。

私たちは、自らの反革命性や小市民性を克服・払拭し、反日帝の闘いに口先きだけでは断じてなく、事実行為で連帯しようと確認し、東アジア反日武装戦線――それはすでに東アジアを中心として反日帝武装闘争が闘われ、さらに深化されようとしている現実、しかも一国規模ではない闘いの現実と、“オトシマエには時効がない”という原則から日帝を打倒する必然を有している東アジア人民の歴史的な革命闘争を私たちは東アジア反日武装戦線と認識し表現したのです。――東アジア反日武装戦線に志願し、闘うことを決意したのです。

その時私たちがいの一番につきつけられた闘争課題は、天皇ヒロヒトへの死刑執行の実現でした。天皇ヒロヒトは、朝鮮人民に「創氏改名」を強制し、日本語を押しつけ、朝鮮語を奪い去り、「皇国臣民」を強要したのです。その結果、四五万人もの朝鮮人民が、日

帝本土、中国大陸、沖縄、北海道、樺太、南洋諸島等に、男は軍属や日帝企業の補充労働力として徴用され、また「皇軍」の弾よけとして徴兵され、婦女子は「皇軍」の従軍慰安婦として徴用、すなわち強制連行されたのです。もちろん、朝鮮人民ばかりではなく、「天皇の赤子」として、アイヌ人民、沖縄人民、台湾人民などが侵略戦争に狩り出され、殺し去られたのです。天皇ヒロヒトは、特に東アジア人民の生殺与奪の権限を掌握し、幾千万のアジア人民を殺害した「皇軍」の最高指揮官です。

日帝の敗戦によって、まっさきに処刑されなければならなかった天皇ヒロヒトが首都東京のド真中で完全防衛され安楽に生き長らえている現実に対し、アジア人民の歴史的な憎悪と怨念は、私たち日帝本国人に、まず天皇ヒロヒトをこそ死刑執行せよ、と要求しています。すなわち、日本人として天皇を殺るか殺らぬかは、日本人による反日－反日帝の闘いが本気であるのかポーズだけであるのか、またその闘いが深化し、持続し得るか否かの鍵、踏み絵なのです。敗戦后解放された日帝の新植民地主義侵略の精神的支柱つまり日本主義は、戦前の天皇制イデオロギーの復権の姿なのです。

私たちがこの天皇制イデオロギーの復権を許し、何ら手を打たずに見逃すことは、旧日帝の現在的な復権を黙過することになります。それらの課題に対して、私たちが用意した回答は、天皇ヒロヒトへの死刑執行を実現すること、つまり天皇暗殺の具体的な作戦計画でありました。

（少し間を空けて）計画

一九七三年夏以降、私たちは天皇暗殺計画を検討し始めました。

私たちは、「殺ろうと努力した」というような、見せかげだけには反対でしたから（例えば、皇居の石垣を爆破するとか、「死刑執行!!」などと何百回も叫びながら皇居に突入するとか等々）確実に殴る方法を検討し、金城鉄壁な皇居から天皇ヒロヒトが外に出てきたところを狙うことにしたのです。

天皇ヒロヒトが外出するのは極めて少ないのですが、それでも探してみると、国会の開会式（日時は未定）、毎年八月十五日、日本武道館で開催される「敗戦記念日、戦没者慰霊式典」等には出席するし、また例年、葉山や那須に静養に出掛けているのです。それらの一つ一つを具体的に詳細に検討し、私たちは天皇ヒロヒトが那須の静養先から「御召」列車で帰京する時に、その「御召」列車を爆破転覆させて処刑するという「御召」列車爆破作戦計画を立てました。

（少し間を空けて）作業

そこで、私たちは東京と埼玉の間にある荒川鉄橋に爆弾を仕掛け、一九七四年八月十四日午前一〇時五八分～午前一一時〇二分の間に通過する「御召」列列車を爆破しようと考えたのです。時間をこのように特定できたのは、やはり種々雑多な資料及び列車時刻表によってであり、さらに約一年弱の準備期間に何回か実際に荒川鉄橋を通過する「御召」列車を見送り、時間を計測しているからです。一九七四年春以降、私たちは何度も夜間、荒川の河川敷へ出撃しました。

私たちは、七月中旬から、毎晩の様に荒川河川敷へ出撃し、実際に鉄橋上で電線のルートを決めたり、爆弾を仕掛ける位置や仕掛け方（固定法）を決めたり、また橋脚づたいに

電線をおろすルートを決めたりしたのです。鉄橋上で、様子を調べたり、他の作業等を出来るのは、深夜貨物列車しか通らない午前一時過ぎから午前四時過ぎの間だけです。私たちは、全員が生活費（闘争資金）捻出の為、また「一般市民」としてのカムフラージュの為、昼間定職に就いていましたから、夜、作業をしていると、ほとんど眠らぬまま会社などに出掛けたり、あるいは良くても朝一～二時間仮眠できただけだったので、全員が睡眠不足やそこからくる夏バテで身体の状態は最悪でした。しかし、全員の闘いに向けた意気は、極めて軒昂であったことは疑いの余地がありません。

翌八月十三日の夜一〇時過ぎ、この日が残された最后の一日、最終日ですから、全員かなり意気込んでいました。

いざ男装東に着替えをして作業を開始しようと思ったのですが、どうもいつもと雰囲気が違うのです。私たちにしてみれば昨日やり残した作業もあり、かなり気分的には急いでいてすぐにでも着手したいのですが、様子が変なのです。得体の知れない男達が最低三～四人分散して私たちの方を注目しているのです。

それで最初は痴漢かとも思い、時を待てば去るだろうと考えていたのですが、何時までたっても立ち去りません。

（少し間を空けて）挫折

そうこうしているうちに時間は経過し、タイムリミットを超えようとしているのです。

だれからともなく、“中止しよう！”という提案がなされました。一年間かけた作戦計画の何とも惨めな挫折の瞬間です。私たちは全員黙ったまま荷物を車に積み込む為動きました。引き揚げる途中の車の中でも全員おし黙ったままでした。いっきょに疲れだけが心身ともにでてきて、何も考えずにただただ眠りたかった。というより、眠るより他に口惜しさや惨めったらしい気持ちをイヤス法はなかった訳です。

天皇ヒロヒトの乗る「御召」列車は八月十四日、私たちの計算した通りの時間に荒川鉄橋を通過して帰京しました。

（少し間をおいて）転換

天皇ヒロヒトの死刑執行をしそこなった翌日、八月十五日の朝鮮解放記念日（日本では敗戦記念日）に、在日朝鮮人文世光義士が韓国で決起するという衝撃的なニュースに接し、私たちは自らの無力感を増大させました。骨のズイまでトコトン帝国主義本国人である私たちは何をやってもドジを踏みつづけるのか？　片方がドジッて挫折している時、片方は単身決起を貫徹する。この対照は、ドジッた奴には耐え難い無力感を与えるものです。しかし、頭の中で何をやっても駄目だと思っている限りはドジを踏み続け、結局衛生無害なことしかせずに終ることになります。帝国主義本国人であり小市民である私たち自身にオトシマエをつけ、駄目サ加減を克服する途は、何度失敗しても、ドジを踏み続けても恐れることなく、恥じることなく、事実行為としての闘いを闘うことです。しかも、手軽ないい加減な闘いではない、己れの退路を絶つ闘いをです。

六月二十五日の船本州治同志の焼身決起と、それに続く四戦士の皇太子攻撃は、まだまだ沙婆には日帝に対して命を賭して闘いを挑む同志が数多く居ること、さらに生まれ続けることを告げ知らせてくれました。七月十九日にはアイヌモシリ侵略の尖兵道警警備部を、

そして八月十五日には首都治安警察を爆破攻撃した東アジア反日武装戦線の同志達の戦いは、私に限りない希望を与えてくれました。

そしてさらに、日本赤軍は“獄中兵士奪還”という、日帝国家権力に痛撃を与える快挙をやったのでした。私たちが逮捕されてから、特に六月以降闘いは連綿と続くのです。海の外では、日帝の侵略企業や侵略者に対する闘いが展開されています。私たちが逮捕され、反日帝の闘いが弱まるどころか、新たな反日帝の闘いは、日帝の内と外で野火のように燃え広がり、人民が主体的に提起する反日帝の大会戦を着々と準備しているのです。将しく人民の積年のウラミ・ツラミは個別分散的に解消されることなく、反日帝の人民の軍隊として組織されようとしています。そして人民の軍隊による怒とうのような大進撃は、日帝のブルジョア支配階級をせん滅し、日帝中枢を席捲し、人民抑圧の権力を駆逐し、私たちのこの手に、人民の手に勝利をもたらすでしょう。

（少し間をおいて）

その為にこそ、私は確信をもって云わなくてはなりません。日帝の最悪・最大の犯罪人＝天皇ヒロヒトを今すぐに獄門首にし、日帝の帝国主義侵略のシンボルに公然と復権させてはならない、と。そしてそれはアジア人民の天皇ヒロヒトに向けた“憎しみと殺意”に共感し、その“憎しみと殺意”を自らのものとした日帝本国人の任務であり、使命である、と。

#②—＊２　警告

「これから重要なことを話すのでよく聞いて欲しい。我々は東アジア反日武装戦線“狼”だが、三菱重工ビルと三菱電機ビルとの間の歩道上にふたつの時限爆弾を仕掛けたすぐに爆発するので、ビルの窓側にいる人員、通行人、車輌を至急避難させなさい。これはいたずら電話では絶対にない。今一度繰り返す。歩道上の時限爆弾はすぐに爆発する。至急避難させなさい。」　松下竜一『狼煙を見よ』前掲

#②—＊３　「三菱重工ビル　過激派が爆破」NHK **ニュース　動画**

#②—＊４

「“狼”通信第１号

一九七四年八月三〇日、三菱爆破＝ダイヤモンド作戦を決行したのは、東アジア反日武装戦線“狼”である。三菱は旧植民地主義時代から現在に至るまで、一貫して日帝中枢として機能し、商売の仮面の陰で死肉をくらう日帝の大黒柱である。今回のダイヤモンド作戦は、三菱をボスとする日帝の侵略企業・植民者に対する攻撃である。“狼”の爆弾により、爆死し、あるいは負傷した人間は、『同じ労働者』でも『無関係の一般市民』でもない。彼らは、日帝中枢に寄生し、植民地主義に参画し、植民地人民の地で肥え太る植民者である。“狼”は、日帝中枢地区を間断なく戦場と化す。戦死を恐れぬ日帝の寄生虫以外は速やかに同地区より撤退せよ。“狼”は、日帝本国内、及び世界の反日帝闘争に立ち上

がっている人民に依拠し、日帝の政治・経済の中枢部を徐々に浸食し、破壊する。また、『新大東亜共栄圏』に向かって再び策動する帝国主義者＝植民地主義者を処刑する。最後に三菱をボスとする日帝侵略企業・植民者に警告する。海外での活動をすべて停止せよ。海外資産を整理し、『発展途上国』に於ける資産はすべて放棄せよ。この警告に従うことが、これ以上戦死者を増やさぬ唯一の道である。

九月二三日東アジア反日武装戦線“狼”情報部」

松下竜一『狼煙を見よ』前掲

#③—＊５　連続企業爆破事件　1974 ～ 75 年

事件名	日時	グループ
三菱重工爆破事件（東京 丸の内）	1974 年 8 月 30 日	狼
三井物産爆破事件（東京 西新橋）	10 月 14 日	大地の牙
帝人中央研究所爆破事件（東京 日野市）	11 月 25 日	狼
大成建設爆破事件（東京 銀座）	12 月 10 日	大地の牙
鹿島建設爆破事件（東京 東陽町）	12 月 23 日	さそり
間組本社爆破事件（東京 北青山）	1975 年 ２月 28 日	6 階　大地の牙 9 階　狼
間組工場爆破事件（埼玉 与野市）	２月 28 日	さそり
オリエンタルメタル社爆破事件（兵庫 尼崎）	4 月 19 日	大地の牙
韓産研爆破事件（東京 銀座）	4 月 19 日	大地の牙
間組作業現場爆破事件（千葉 市川市）	4 月 28 日	さそり
間組作業現場爆破事件（千葉 市川市）	5 月 4 日	さそり

#③—＊５　メンバーその後

１９７１年 東アジア反日武装戦線結成　構成メンバーと現在の状況

「狼」

・大道寺将司（当時 26 歳 会社員）雑誌販売会社勤務。死刑確定 2017 年 東京拘置所で病死 68 歳

・大道寺あや子（当時 26 歳 会社員）薬剤師 77 年、日本赤軍によるダッカ事件で釈放・出国。
現在も国際手配中

・佐々木規夫（当時 26 歳 会社員） 75 年、日本赤軍によるクアラルンプール事件で釈放

・出国。
現在も国際手配中

・片岡利明（当時 26 歳 会社員）理系大学卒 爆弾製造の中心的役割 死刑確定

・荒井まり子（当時 24 歳 会社員） 法政大学中退し、東北大医療技術短大に進学 懲役 8 年 1987 年に出所

「大地の牙」
・斎藤和（のどか 当時 27 歳 ウェイター）東京都立大学人文学部哲学科中退、逮捕日に青酸カリカプセルの服用により自殺
・浴田由紀子（当時 24 歳 臨床検査技師）北里大学衛生学部卒 日本赤軍によるダッカ事件で釈放・出国。1995 年 3 月にルーマニアで逮捕され、日本に強制送還 懲役 20 年 2017 年 3 月 23 日に刑期満了で釈放 2017 年 3 月「えきたゆきこ」の筆名で作家デビュー
「さそり」
・黒川芳正（当時 27 歳 会社員）東京都立大学人文学部哲学科に進学 無期懲役
・宇賀神寿一（うがじん ひさいち 当時 22 歳 会社員） 明治学院大学社会学部に進学 懲役 18 年 2003 年 6 月 11 日に出所
・桐島聡（当時 21 歳 大学生）明治学院大学在学中に進学 2017 年現在まで一度も逮捕されていない

#④—＊６ 連続企業爆破事件—大道寺将司死刑囚が獄中で病死 Daily Motion **動画**
#⑤—＊７ 註 iv
#⑥—註 v
#⑦—註 vi

註 i

福田善之「魔女伝説」（三一書房）から

註 ii

1974 年（昭和 49 年）に日本の武闘派左翼テロリストグループである東アジア反日武装戦線が立案した昭和天皇に対する暗殺計画。

立案

1970 年（昭和 45 年）春、法政大学の学生で中核派出身の大道寺将司らが結成した「L クラス闘争委員会」は尖鋭化の一途をたどり、極端な反日思想のもと実力行使も辞さないまでに過激化していった。1972 年（昭和 47 年）冬、「東アジア反日武装戦線」を名乗る大道寺らは本格的な武装闘争の準備を開始、そのターゲットの中には、第二次世界大戦によって「幾千万人ものアジア人民を圧殺した、この大犯罪人を処刑することは、反日思想の当然の帰結である」として昭和天皇が上がっていた。

1973 年（昭和 48 年）頃から、暗殺計画が浮上していたが、具体化し始めるのは翌 1974 年（昭和 49 年）からである。犯人グループは天皇の行動を調べ、全国各地で多様な公務をこなしながらも毎年 8 月 14 日だけは那須御用邸から皇居にお召し列車で帰還し、翌 8 月 15 日の全国戦没者追悼式に備えるという行動パターンをつかんだ。彼らはこのお召し列車を天皇もろとも爆破することを決意、爆弾の設置場所は、埼玉県と東京都の都県境に架かる東北本線・赤羽 - 川口間の「荒川橋梁」とした。彼らは「昭和 49 年 8 月 14 日」をもって昭和時代を終わらせる作戦に高揚したという。

ちょうどその頃から、「セジット」という爆薬の開発が進められ、1974 年（昭和 49 年）8 月 14 日の決行日に合わせるために急ピッチで爆弾が製造された。

当初は無線による遠隔操作でお召し列車通過のタイミングに合わせて鉄橋の線路を爆破するつもりだったが技術的問題により挫折し、有線方式での爆破を企てた。

決行

1974 年（昭和 49 年）8 月 14 日の作戦実施に向け、行動が開始された。

迷彩を企図して黒装束に身を包み、殺傷能力を持たせた改造モデルガンとナイフで武装した彼らは、前々日の深夜より三夜にわたる予定で、爆弾を爆発させるための電線の敷設を行い始めた。しかし、二日目（爆破計画前夜）の作業中、私服警察官とも浮浪者や変質者とも考えられる正体不明の第三者が橋脚付近に姿を現し、周囲を徘徊し始めた。これを自分たちに対する監視、包囲の動きかもしれないと警戒した犯人グループは計画を察知されることを恐れ敷設を断念、計画は未遂に終わった。近い将来に虹作戦を再び行うため、電線はすべて回収し、証拠を隠滅した。

なお、犯人グループの計画では、お召し列車が走る全区間で警察や国鉄関係者による最終調査・点検と警備が実施されることが考慮されておらず、仮に電線の敷設が完了していても、事前に察知される可能性があったことは否定できない。事実、虹作戦当日の荒川鉄橋でも通過時間の前後には警察官らが不審物の検索を行い、お召し列車の警備に当たった。また、爆弾を仕掛けようとしたのは東北本線（現宇都宮線）上り線の橋梁だったが、実際にお召し列車が通過したのは隣接する東北貨物線上り線（現湘南新宿ライン南行）であった。

この虹作戦のために製造されていた爆薬「セジット」は、後に「三菱重工爆破事件」に使用されている。この事件は大量の死傷者を出す太平洋戦争後最悪の爆弾テロとなったが、予想を上回る大惨事になったのは、本件で列車・橋梁爆破に使うはずだった強力な爆弾を転用して市街地の歩道に設置したためである。

翌年の 1975 年（昭和 50 年）5 月 19 日にメンバーが一斉逮捕されたため、虹作戦が再度実行に移される事はなかった。　　「虹作戦」―ウィキペディア（Wikipedia）から

註 iii

東アジア反日戦線とは、当時タイなどで頻発していた東アジアの「日本製品不買運動」、

列島各地の反開発・反公害地域住民運動、東アジア反日武装戦線が一つの「戦線」を構成しているという認識。

私が殆ど衝撃的に豆腐屋を廃業して著述業に転じたのは一九七〇年七月であるが、そこまで私を思い詰めさせたのが全共闘運動の熱気であったといって過言ではない。これまでの閉じ籠もった生活からおそまきながら社会的行動へと踏み出したいという思いで踏み切った私を待ち受けていたのが、足下の巨大開発問題であった。国が進める周防灘総合開発計画は、山口、福岡、大分三県にまたがって沿岸を埋め尽くすという巨大プロジェクトで、もし実現すればわが町は公害激甚地に一変するはずであった。私は隣り町で具体化している巨大火力発電所建設計画が、この総合開発計画を牽引するエネルギー拠点と見て、まずこの発電所建設に反対する運動に集中していったが、開発期待の強い地方小都市での運動は孤立していかざるをえなかった。昨日までの「豆腐屋の季節」の模範青年はあっという間に「市民の敵」とされ、この町から出て行けという声を浴びせられることになった。

一九七三年八月、私はわずかな同志と共に火力発電所建設差し止め裁判を起こしたが、弁護士も頼めぬ本人訴訟であった。その裁判が始まって間もない翌年六月、電力会社は私達の「係争中だから、せめて判決の出るまで待つべきではないか」という声を押し切って、海岸の埋め立てに着工する。訴訟をも無視しての理不尽な強行着工に対し、私達は阻止行動をとらざるをえなかったが、わずか一日の阻止行動が威力業務妨害罪に問われて、三人の同志が逮捕され刑事事件の被告とされていったのだ。

一九七四年八月三十日といえば、三人の同志が保釈で出てやっと十一日目にあたる。私は反対運動の立て直しと刑事裁判対策を思い悩んで苦しんでいた時期である。しかしその事件を深く考える心の余裕など持てなかったに違いない。おそらくそのときの私は多くの人びとと同じように、強い反対以外の感想は抱かなかったと思われる。いや、考えてみれば当時私は小さな町の過激派と呼ばれ始めていたのであり、そのことからすると過激派の犯行とされたこの爆弾事件は明らかに迷惑であったように思う。

いま、“狼”を見直していく作業の中で、いかに私はそのとき彼等の近くに居たのかを改めて知るのであり、その驚きに打たれている。私が巨大開発に反対し、発電所建設を拒否した根底には、単なる公害問題を超えた大きな視点があったのだが、それは例えばタイなどで頻発していた日本製品不買運動まで見据えてのことであった。海外への経済侵略をやめさせるためにも、これ以上の巨大開発は断念すべきであり、日本がこれ以上の経済大国になってはいけないのだというのが私達の運動理念であった。東アジア反日武装戦線を名乗る彼等ほどには、明確に理論化されず政治目的化されていなかったとしても、彼等と私達の行動の動機はかなりの部分で重なっていたのだといえる。

松下竜一・『狼煙を見よ』前掲

註 iv

死者たちに如何にして詫ぶ赤とんぼ
春雷に死者たちの声重なれり

方寸に悔数多くあり麦の秋
死は罪の償いなるや金亀子
まなうらに死者の陰画や秋の暮
ゆく秋の死者に請はれぬ許しかな
夢でまた人危めけり霹靂神
笹鳴や未明に開く懺悔録
いなびかりせんなき悔いのまた溢る
ででむしやまなうら過る死者の影
寝ねかねて自照はてなし梅雨じめり　　大道寺将司「棺一基」から

註 v

「立棺」
1
わたしの屍体に手を触れるな
おまえたちの手は
「死」に触れることができない
わたしの屍体は
群衆のなかにまじえて
雨にうたせよ
　(中略)
2
わたしの屍体を地に寝かすな
おまえたちの死は
地に休むことができない
わたしの屍体は
立棺のなかにおさめて
直立させよ
　(後略)

田村隆一詩集『四千の日と夜』から

#⑦—註 vi

日本の左翼の中で、戦前と戦後の日本国家の侵略の連続性という事態に最も真摯に向き合おうとしたのが東アジア反日武装戦線だった。一九七四年、この『戦線』の一グループは、お召し列車が荒川鉄橋を渡る瞬間をとらえて、天皇にテロを加えようと試みた。世に言う「虹作戦」である。

彼らもまた、敗戦処理のトリックが生みだした欺瞞を標的として、「敵」であった戦勝

国アメリカに延命させてもらった「天皇制国家」の歴史と現在を否認しようとした。この点は正反対の政治的立場にあった三島由紀夫と通じている。東アジア反日武装戦線は、敗戦処理のトリックが生んだ天皇制国家の欺瞞と欺瞞の上に築かれた繁栄を撃とうとした。

両者が決定的に異なるのは、三島由紀夫が、理想の天皇制が実は「終わっている」ことを撃とうしたのに対して、東アジア反日武装戦線は、許容しがたい天皇制が持続していることを糾そうとした点である。

三島由紀夫の「蹶起」からほどなく、マスコミは極力この「事件」にふれるのをさけ、世上ではほとんど論議されなくなった。できれば〈あったこと〉を〈なかったこと〉にしたいという〈強大な意志〉がそこには働いていた。他方、「反日」のグループの刑事裁判では、「虹作戦」は訴因から除外された。検察と司法の意思で〈あったこと〉が〈なかったこと〉にされたのである。〈あったこと〉とは、天皇制の神聖性への留保の余地のない侵犯行為を日本人自身が企てたという事実である。〈なかったこと〉にした、とはそういう日本人は日本国家には存在しないから、裁判から見えなくするということである。

菅孝行「三島由紀夫と天皇」（2018・平凡社新書）

資料Ｃ―２　笹岡紘子の軌跡（『冬の光』から作成）

笹岡紘子の軌跡　Giovanni Marradils Greates tHits mpq　　富岡康宏が語る

P83　キャンパスでその風姿

「ポニーテール　明るい色の髪　黒いハイネックノシャツ　水色のジーンズ」

「奥二重　白目の青白さが印象的　褐色の瞳」

「外交官の娘　ピアノの腕　硬質な美貌」

「セクト間のゲバ　康宏に救出される」

「4 年間の後半　恋人同士」

「康宏　旧財閥系の重工業メーカーに就職」

P90　「紘子　マスターとして」

「その後 40 年ちかく大学人として」＊ P90

康：変節を恥じる自潮的なことば

紘：皮肉と無力感のにじんだことば

P91　康：「社会に出て一番変わったことは、ものを考えなくなったって事かな』

紘：『考えないって、つまり問題から目をそらし、自分さえ善ければいいって事でしょう」

P96　無理矢理の SEX　その後の儀式のような逢い引き去って行ったのは紘子の方『反動の手先、戦争犯罪人、殺人者！』

『少女に留まる事を許される女と大人にならざるをえない男』

P99　それから 38 年､紘子は頑張った。そして力尽きた。

P103　紘子との間にあったもう一つの溝」＊ P103

P111　康宏　パリ～地方都市ナントへ　添乗員・雑用係として　紘子と出会う　不穏で強烈な輝きを纏って、紘子はそこにいた。　11 年ぶりの再会　中世美術を中心とした美術館の開設準備のための客員研究員として　20 代終わりに 3 年間留学

P122　昔と全く変わらぬ身なりで、しかしあの頃よりも透明感が増し、柔らかさが加わって

大学院進学という選択は、彼女にとってまちがいでなかった。「中世キリスト教のロマネスク壁画とイリュージョニズム」

名前はそのまま。『結婚という制度にも、互いを所有として囲い込む男女関係にも、興味はないの』

P127　ヴイクトルー　ルームメイト

P132　紘子帰国　三十代も後半に入ってなお少女だ。

北方ルネッサンス美術の公開シンポ　紅一点

P134　和やかな美術談義に紘子は学術的な論議を持ち込もうとした

『その女を即刻退場させなさい』

P137　『日本に戻ってきたら、女の研究職に割当てられるのは研究ではなくて、教育、文化活動ばかり。』＊ P137-139

『結婚しないことと一人で生きていくってことは関係ないでしょう』

＊ P140-141

P151　二人で食事中に、妻が突然現れる。怒りと不信感のこもった視線、なにも言わずに。　妻の父と兄に謝罪と念書

P156　新聞で、彼女の受賞のことを知る。祝電を送る。

アジアの現代作家展に誘われる。

ある絵をめぐる紘子とスタッフのやりとり。＊ P159-161

P162　紘子の論文を指導教授が彼の弟子の名前で発表したとのこと。＊ P162-168

紘子の怒りと教授への抗議・却下

『同窓会報」に載った紘子の文章＊ P170

紘子からのメール＊ P170-171

P181　紘子、提訴、そして、敗訴　大学除籍　小さな語学学校のフランス語講師翌年新設の清花学園女子大学の非常勤講師『総合美学科」の「生活美学」担当＊ P182

その一方で「事件」を起こし続ける。人気者とトラブルメイカー。『助手の過労死』＊ P183-187

紘子、その問題を発信　バッシング始まる　「アカデミックノ、ラスメント」として＊ P192-193

P194　康宏、『海外アーチスト招聘』の仕事につき、専門委員を紘子に委嘱

P198　企業は文化貢献から撤退

紘子は学内でも浮き始めていた。＊ P199

学内の事件が起きた＊ P199-202

『結局、私は道化だったのよ。』

かっては美しかったが、今は妖怪じみて見えるほどに
変貌してしまった。
『それでは是で。また』また、などありえない。すくなくともプライベートな場面では。
その後のメールのやりとり。康宏＊ P208-210

P210　康宏　子会社への出向　出世競争の終わり

P215　かって出向していた財団からの一通の招待状その会場で紘子と再会　その日を境に交わりの再開

P219　その間に紘子の身の上に起きたこと。＊ P219
それが紘子と逢った最後

P221　妻・長女に詰問される。留守電で二度と逢わないことを告げさせせられ、「念書」を書く。

「東北大震災」
紘子の死を聞く。
康宏、東北へボランティアに。
紘子の勤務校の近くへ　P278-280
ボランティア中に同じ勤務校の女性准教授と出会い、紘子の最後を聞く。津波の災害ではなく、病死。同じアパートの住人達が避難した部屋で。－「ソファの背に身をもたせかけて目を見開き､右手で箸を握り、テーブルの上の飯の盛られた茶碗に左手をかけ、この家の主が座っていた。」

P281　紘子の晩年＊ P281-286
「語学や文化系の女性研究者のネットワーク」を立ち上げ。『先生に感謝している人は多いはずです。・・でも､最後に裏切るんです。・・・先生の女性学講座も、大学側の圧力ではなく、単純に来なくなって無くなったんです。・・・先ずは攻撃して壊す。なんでも壊して､更地にしてからでなければ新しいものはつくれないと信じている・・・・崇拝者はいないではないんですが、ある程度親しくなると、みんな離れていきました。この数年は、どんどん狽介になっていって、顔まで変わってしまいました。顔つきというより、顔立ちまで.　・・・』

「バリケードの中の 20 代から還暦を超えるまで､平和この上ないこの 40 年の間に､世間の風向きは激しく変わっていった。そのなかでなぜ紘子は常に逆風に身をさらすような生き方しかできなかったのか。」

P458　P459-461 『険しい断崖の縁を裸足で歩くようにして､若い苗木を護り育てていたのだった。』

資料Ｃ―３　坂本守信さんの軌跡

「最後の一人まで」－坂本守信氏の軌跡

坂本守信

～東京生まれ～東京大学文学部英文科～東京大学大学院修士課程

68 年 4 月　岡山大教養部講師

69 年 4 月　①教官会議に出席せず、その決定に拘束されないとの文書提出

5 月　②教官会議の開催通知に対して､抗議声明を提出、以後同会議に出席せず

③授業及び業務拒否～～「現段階での正常化＝授業・期末試験」を拒否＝「〈　　〉―表現不可能な創造時空間の追求」

④機動隊導入・授業再開に反対して座り込み

6 月　バリケード撤去に抗議して座り込みテントをはる。

9 月　授業再開に抗議して 3 日間のハンスト

70 年 4 月　懲戒処分停職 5 ケ月～～〈　　〉続行宣言

5 月　人事院に不服申し立て

6 月　「教官パージ反対」の全学ストライキ

72 年　前期「オール 80 点・優」の評価（69 年以降継続）「片山恵子」名義で郵送　教官会議留保　他教官による再テスト『単位認定権」という問題

5 月以降　教養〈103〉教室バリスト　次いで教養部バリスト

6 月、7 月　機動隊導入　学生逮捕、処分攻撃

73 年　〈単位制〉解体闘争を〈103〉教室占拠闘争としても展開

75 年　自他の〈n〉事審理に対処しつつ､岡山大学サークルの連合組織である「学友会」の事務嘱託員となる。学友会の事務を介して､新たな共同性をもさくする。

84 年　学友会主催の大学祭を応用的に活かすべく、敢えて大学祭を行わず、学外者との討論をふくむ『大学祭を考える連続シンポジウム」を 7 回にわたって行い、大学祭・大学それじたいなどをテーマとする試みを行う。この試みはその後も継続される。

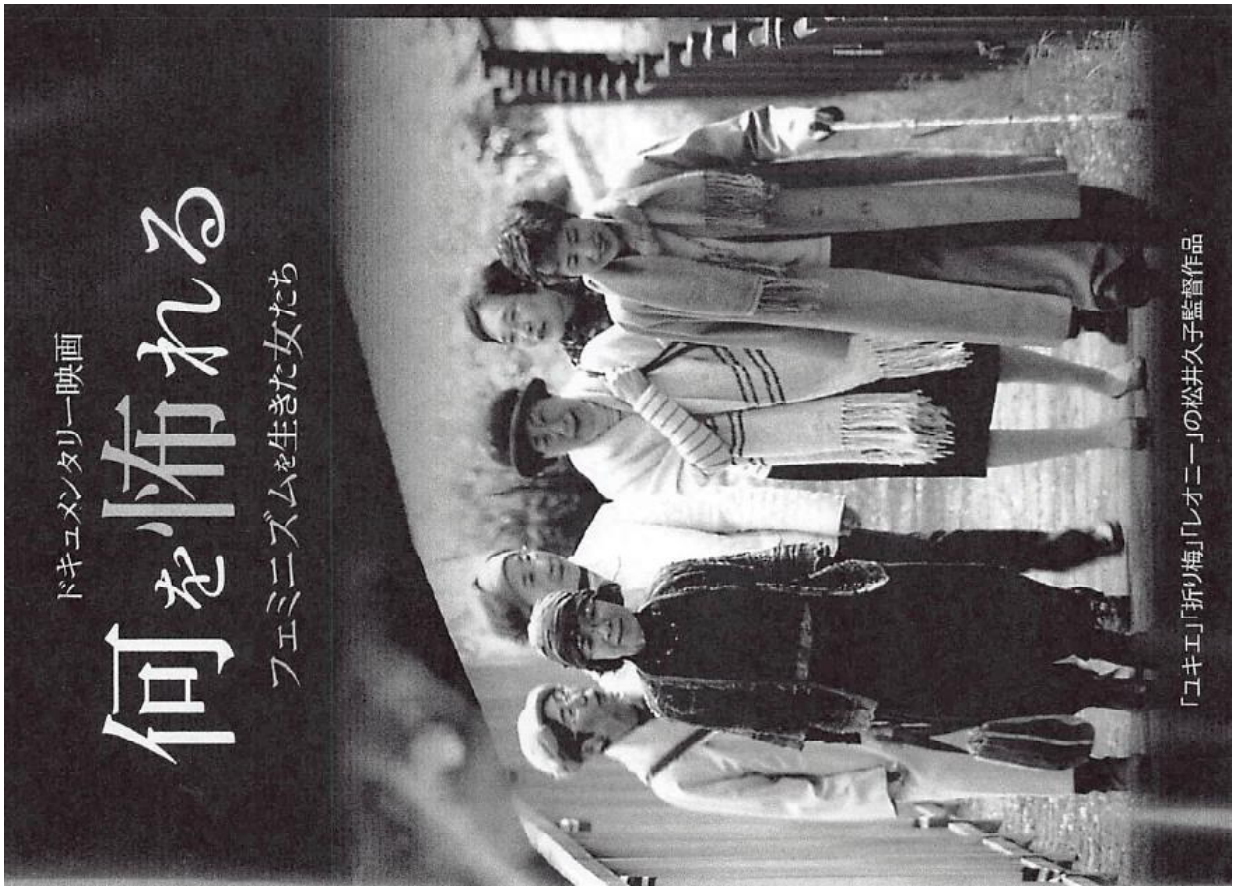
95 年　大学当局は『学友会正常化」の名目で､『学友会」自治潰しを画策し、大学評議会で「校友会の設立と学友会の解散』を決定し､『学友会」加盟サークルに脱退と『校友会」加盟を強要。さらに『学友会』事務室を閉鎖。8 月解散を無効とする学生等が構外に「学友会臨時事務室」を設置

03 年　広島高裁岡山支部『大学は学友会を解散する権限無し」と判決 12 月最高裁小法廷、大学側上告を棄却

04 年　最高裁第 3 法廷、坂本雇用確認訴訟で、請求棄却その後〈岡山大学学友会〉公開講座実行委員会は、最高裁判決を認めず､〈学友会〉の存在と意味および軌跡を公開し、関連するテーマおよび情況性を対象化するとともに戦後総括を含む大学紛争後現在に到る情況性総括へと迫る公開講座をすすめている。また､「自由塾通信」､作品『夢の記憶」等を表現～発行し続けている。

※　現在について　25 ページ参照

註⑥ 資料Ｄ―２



70年代初頭に始まったリブ運動からほぼ40年。女性をとり巻く環境は大きく変わりました。この変化には、女かのぞんだ変化も、のぞまなかった変化も、想定外の変化もありました。のぞんだ変化の多くは、女であることを愛し、女たちと共感し、女たちとつながって、それぞれの立場で活躍してきたリブやフェミニズムの女たちの志がもたらした成果でした。男社会から疎まれても、同性たちの偏見や誤解の目にさらされても、すすんで自らを「フェミニスト」と名のり、目の前に立ちはだかる壁と闘いながら生きてきた女たち。彼女たちのエネルギッシュな生と活動の軌跡は、同時代を生きている者や後から産まれた者たちに大きな勇気を与えてくれるでしょう。そんな女たちも年齢を重ね、回顧の季節を迎えています。彼女たちが生きてきた歴史と人生の厚みを、まだ間に合ううちに記録に刻み次の世代に手渡すため、市民の募金によって製作されたドキュメンタリー映画です。

出演者

池田恵理子　駒尺喜美　滝石典子　樋口恵子
井上輝子　桜井陽子　田中喜美子　米津知子
上野千鶴子　高里鈴代　田中美津
加納実紀代　高橋ますみ　中西豊子

製作　「フェミニズムを生きた女たち」をつくる会
制作・著作　株式会社エッセン・コミュニケーションズ
助成　NPO法人ウイメンズアクションネットワーク
ジェンダー平等をめざす藤枝澤子基金

註⑥ 資料Ｄ―３　坂本守信さんのたたかい

資料Ｃ―３　坂本守信さんの軌跡　続き

【　現　在　】　学友会解散後２０～年、定期的に公開講座を開き、「自由塾通信」や作品「夢の記憶」等を表現～発行し続けている。

連絡先：岡山市北区大和町２－５－１６　岸本ビル一階
学友会臨時事務室（電話０８６－２３２－８９３０）

近刊予定

訥々私録・Ⅰ
―余聞：極私的大学闘争終焉記　1973～79―

「ぼくらはきみによって／きみはぼくらによって
ただ／屈辱を組織できるだけだ／それをしなければならない」

註④　資料Ｂ―３　坂手洋二　『最期の一人でま全体である』

最後の一人までが
全体である

最後の一人までが全体である　坂手洋二戯

9784846202682
1920074022007
ISBN4-8462-0268-2
C0074 ¥2200E
定価（本体2,200円＋税）
れんが書房新社

最後の一人までが全体である
ブラインド・タッチ

クボ　……あなたはほんとうに、この大学の教員だったのですか。
サワダ　そうだ。
クボ　科目は？
サワダ　英語。
クボ　出欠は？
サワダ　とらない。
クボ　教科書は？
サワダ　勝手に選べ。
クボ　授業は？
サワダ　好きな本を持ち込んで読め。わからなければ聞けばいい。
クボ　大学紛争がはじまると、授業を放棄しましたか。
サワダ　機動隊が学内に導入された。授業なんかやっていられるか。
クボ　全ての学生に八十点をつけたというのはほんとうですか。
サワダ　[illegible]。

サワダ　研究室に顔を出せば「優」をつける。
クボ　試験はないのですか。
サワダ　……教官が学生を評価するということは可能か？
クボ　「オール八十点・優」の成績表用紙を「緒方保子（オガタヤスコ）」名義で郵送したというのは？
サワダ　ほんとうだ。
クボ　その女性は誰です？
サワダ　……。
クボ　あなたにとって大事な人ですか。
サワダ　……。
クボ　教官会議はその成績表を保留して他の英語教官による再テストを行いましたね。
サワダ　なぜ教養部はN教官に代わって単位習得の判定を行いうるのか。一枚のペーパーテストで見も知らぬ生徒に成績の判定を下すのか。
クボ　一九七二年五月、大学当局は国家公務員法に抵触するとして、あなたの懲戒処分を発表しました。
サワダ　……。
クボ　あなたは支援する学生と教養部のバリケードに立て籠もった。

クボ　職を失ったあなたは、学友会の嘱託事務員として雇用され、大学当局と敵対しながら、その後の学園闘争の拠点となった。

サワダ　私は教官だ。

クボ　授業をしていないのに？

サワダ　解雇が不当なものである以上、私は教官以外の存在たりえない。

クボ　あなたの授業を受けることは可能ですか。

サワダ　君が望むなら。

クボ　いつ、どこで？

サワダ　人類が知覚した全ての空間を教室とし、言語によって記述しうる時間の総体を授業時間とする。

クボ　あなたが学生に送った最後のコトバを覚えていますか。

サワダ　「最後の一人までが全体である」

クボ　どういう意味ですか。

サワダ　……。

クボ　このコトバを送った意図は？

サワダ　「最後の一人までが全体である」

註⑥ 資料Ｄ―１

特集・東アジア反日武装戦線

虹の力にみちびかれながら

桐山襲

一九七二年の春は、暗い春であった。

その頃わたしは、首都から遠く離れた、陽光だけはまぶしい、人口五千人ほどの小さな海辺の町に働きながら、暗澹たる春の日々を送っていた。

自分の体の中に、暗い巣のようなものが作られていた。勿論、生身の人間であるのだから、穴ぼこの中に閉じこもっているという訳でもなく、三つほどの労働組合が集まって、その町はじまって以来の「春闘共闘会議」を作ってみたり、バス会社のストライキの支援に出かけたりという具合に、表面上はいかにも労働者らしく生きていたのであるが、それらのことによっては取り払われることのない何かが、たしかに体の中に巣くっていた。

なんでこんな
暗いねんやろ
暗い、暗い、暗い。

どこかで読んだそんな詩（？）が、ほどよく身に纏わりついている。そんな日々であった。海辺の陽光はたしかに肌に感じられるのだが、春の中で青さをました海も、そして入江の土手に咲いていた桜も、黒々とした陰画のような印象でしか記憶に残っていない。たしかに黒かった。黒い海に、黒い微細な花びらが舞い散っていた――。

この暗い日めくりの一枚前には、雪の山岳地帯で写された一枚の画像がある。

一九七二年二月、連合赤軍――彼らが雪の山岳ベースの中

で死に至らしめた者たちの死骸が発掘されたとき――そのときの暗澹たる衝激は、それから十余年を経た現在においても、十分に伝え得る言葉を見出すことがきわめて困難なほどである。

彼らの銃声が最初に響きわたったのは、二月十九日夕刻のことであった。それ以降十日間にわたる雪の中の攻囲戦、首都を覆い尽した異様な厳戒状態――しかし、五人の兵士たちの闘いが終ったとき、多くの者にとって救いであったのは、兵士たちと共に山荘の中に在った管理人の妻が、兵士たちによって何ひとつ傷つけられることなく、たしかに兵士たちとの心の交流を保ったまま、TVを通じてわたしたちの前に現れたことであった。彼女は、兵士たちのやさしさについて語り、「だいじにされていた」と語った。怖かったかという質問には、「ガス弾が怖かった」と答え、犯人たちが憎いかという質問には、ただ静かな無言を貫いたのだった。彼女が兵士たちと共に在ったただ一人の〈人民〉であったとするならば、兵士と人民との回路は決して断ち切られてはいなかったのだった。だが――

その直後の兵士たちの全面自供、次から次へと掘りおこされる雪穴、幾つもの黒い死骸……

その凍てた画像を、TVはこれみよがしに一日中流し続けた。そのとき、TVや新聞から目をそむけようとする多くの者たちを支配していた感情は、怒りであったろうか、絶望であったろうか、悲しさであったろうか――わたしには、〈くやしさ〉であったように思えてならない。

雪穴は、春になっても消えることがなかった。一九七二年の春は、こうして、暗い春であった。

いや、連合赤軍だけではなかった。それまで出会ったことのないような不可解な事件が続いていた。

朝霞事件が起こったのは、七一年の秋であったが、七二年にはいるや否や、あろうことか京大の滝田修氏がその事件の黒幕ということで全国指名手配された。

朝霞事件――これほど不可解な事件はなかった。自衛隊朝霞基地に侵入した何者かによって自衛隊員一名が刺殺されたのであるが、そこには「赤衛軍」と書かれた旗とヘルメットが残されていたというのである。

（おかしいんじゃねえのか、これは――）

多くの者がそのように直観した。もしも武器の奪取や自衛隊員殺害が目的であるなら、旗を持ったり、組織名のはいったヘルメットをかぶって行くなどということがあるはずがない。また、一定のカンパニアであったというなら、夜中に刃物をもって、というのはいかにもおかしい。何かがおかしい……。

異様な事件はさらに続いた。

その頃、首都における爆弾闘争は散発的に続いていたのであるが、まるでそれを〝総括〟しようとするかのように、「法大レーニン研」グループが、土田邸などの爆破容疑によって逮捕されたというのである。わたしは人からの噂によって、彼らがそのような路線とは無縁な存在であることを聞き知っていた。勿論このことは、逮捕した側も十分に承知の上であったのであろう。全く何の関係もない者が、爆取という恐るべき法律で逮捕される……どのような小さなグループであれ、根こそぎに壊滅させられて行く……。恐怖はとどまることなく増幅した。この頃ほど、権力というものが巨大なものに見えたことはなかったであろう。そしてこの頃、首都において、少なくない数の者たちが、爆弾とは全く関係のない者たちの氏名の記された名簿・住所録・手帖などを、ばくぜんとした恐怖感におそわれながら、次から次へと焼いていたはずである。まるで、一九六〇年代末期の高揚した日付の一つ一つを焼いていくように――。

(なんでこんな、暗いねんやろ)

このような年が幾年か続いた。そして――その頃もなおわたしは小さな海辺の町で働らいていたのであるが――突如として三菱重工の爆破が起こったのであった。

それはまさしく突如としてというものであった。

わたしは幾人かの友人とこの事件を話しあったのであるが、それを遂行した組織の輪郭、具体的なイメージを、誰ひとりとして思い描くことができなかった。そして、続いて三井――。

(反日武装戦線って、いったい何なんだ? 意味ないじゃないか、企業なんかばっかやって――)

正直に言って、当時の反応はかくの如くであった。それに〝狼〟とか〝さそり〟とかの名前が、(当時の感覚としては)いかにも〝うさんくさい〟と感じられたのだった。

そのようなわたしが、東アジア反日武装戦線にあらためて注目するのは、兵士たちが一斉逮捕されたのち、七五年の夏の終りころであったと思う。朝日新聞に「虹作戦」というものが存在したというスクープが載った。そしてそれを追いかけるように、事態を明らかにした『救援』が届いた。六月中に虹作戦に関する取り調べを終っていたという司法は、おそらくは、九月の天皇訪欧の時点まで、この途方もないニュースを隠しておきたかったのであろう。いや、隠せるものならば、永久にそれを隠し、その事実そのものを存在しなかったことにしたかったのにちがいない。

この「事件」の存在を知ったときの驚きは、一種異様なものであった。単に絶望したテロリストの行動とは受け取れないものがあった。実際、その頃『救援』によって伝えられた

兵士たちの姿――分離公判を拒否して、激烈な獄内闘争をくりひろげている兵士たちの姿は、深い信念と、まごうことない真実を自らの個体に宿している者たちの姿として、多くの者にただならぬ感銘を与えていたのである。わたしは、（うさんくさい）という当初の判断を全否定しなければならなかった。

（彼らはもしかすると、バリケードから生まれた者たちの中で、もっとも遠くまで行ったのかも知れない……）

わたしは「虹作戦」というものを、どのように受け取めたらよいのか考え続けた。当時はまだ『反日革命宣言』（鹿砦社）も出版されておらず、わたしは情報の絶えた海辺の町にとどまっていたから、それは文字通り暗中模索というものであった。

「虹作戦」は、それを一個の政治戦術としてみるならば、きわめて理解し難いところがあった。最初に日本帝国主義打倒なり、帝国主義ブルジョア政府打倒なりの政治目標を掲げ、そこへ至る諸闘争の一環として位置づけるには、それは余りにも異質でありすぎた。後に兵士の一人が意見陳述の中で述べているように、「もし虹作戦が成功していたならば、そのあとに吹きあれる右翼のテロと弾圧の嵐、そしてファシズムの到来」ということが予料されないはずはないのであるから、それは一個の戦術としてはきわめて立て難い性格のものであるはずであった。

また、単なる政治宣伝として計画されたと考えるには、それは余りにも本格的でありすぎるように思えた。――およそ政治宣伝というものは――それがいかに衝激的な方法をとろうとも――どこかに啓蒙主義的な色彩が残されているはずである。つまり、未だ目を開いていない民衆、その民衆全体に対する根底における信頼ともいうべきものが不可欠なものとして在らねばならない。この国には生まれることの少ない真実の哲学者の一人である森有正氏は「民衆が真面目に生活しようとしていれば、民衆は起つものである」と述べているが、そのような自国民衆への信頼というものが、存在しているはずである。

ところが「虹作戦」は、全く異なった思考から導き出されているようにわたしには思えた。兵士たちが民衆不信を基礎にしているというのではない、そうではなくて、そのような民衆も何も、すべてを取り払った果てにあらわれる〈己れ自身〉の問題として――最終的には厳しい自己倫理に帰属する問題として――それは存在しているように思えた。

〈己れ自身〉の問題、とわたしは書いたが、全世界を己れ一個の在り方にまでひき絞っていくそのような精神の姿は、言うまでもなくかつての全共闘運動の中で、〈自己否定〉の

論理として、深く且つ広い共感性をかちとり得たものであった。多くの者は、そのような〈自己否定〉から〈大学解体〉に至りつき、しかしそこからは、新左翼党派の政治スローガンへと自らの論理を接合させていったのであったが、そのような接合を拒否し、〈己れ自身〉の問題をその極北にまで延長させて行ったとするならば、それは「虹作戦」という一個のめくるめく地平に到達して行くであろうことが、おぼろげながら了解できるのであった。

わたしが後になって読み、あらためて深い揺さぶりを受けることとなる『反日革命宣言』は、自らの精神の出発点を次のように描いている。

「われわれ日本人は、アイヌモシリ、朝鮮、中国に対して侵略を行なってきた帝国主義本国人であり、現在もその生活は被植民地人民の生活を犠牲にして成り立っている。それゆえ、自らを世界革命の主体として形成していくためには、まず何よりも、日帝本国人たるオノレ自身へオトシマエをつけることが問われている」

この文章の異様なまでの高揚感は何であろうか。これはアジテーションではない。強いてアジテーションであるというならば、自らの魂へ向けてのアジテーションである。「政治プログラム」も「自国民衆」も、すべてを無化するような、世界と己れ一個の関係の中に、いっさいの思考と実践をつなぎとめたとき、バリケードの中から産まれた〈自己否定〉の論理は、〈反日〉という頂点へと登りつめたと見ることができよう。

「生の拡充／生のサンジカ」プロジェクト・2020

2040年問題に斬りこむ

――生／命の再生産をめぐる
「反」革命と「絆（ハン）」革命の攻防――

ドキュメンタリー「父は老いて生きる　南砺で」制作中

日程などは後日案内

生・労働・運動ネット 富山　代表　埴野　謙二

〒930-0009 富山市神通町３－５－３
TEL：076-441-7843　Fax：076-444-6093
URL：http://net-jammers.net/
E-mail：jammers@net-jammers.net